

# 子どももの心ケアへ「交流」

10月半ばの週末、東京都内の公共施設に、女性とその子どもたち十数人が集まった。子どもは小学生もいれば未就学児、乳児もいて年齢は様々。母親たちが調理室を借りてチーズケーキを作り始めると、一緒にクリームを混ぜたり、他の子どもと駆け回ったりして過ごした。

「これは「ダルク女性ハウス」(東京)が月に1度開いている、薬物依存症の女性とその子どものための「母子プログラム」。お菓子作りや遠足などを親子で一緒に楽しむ。薬物依存者のママ同士、友人となるのが狙い。同時に、子ども同士が互いに知り合う機会を持つという目的もある。

この日、スタッフとして参加していたミキ(39)は覚せい剤を15年近く乱用し、6年前からダルク女性ハウスに通っている。この間、長男(17)との関係に悩み続けてきた。

長男が小学生の時、ミキは覚せい剤を使った後に路上で騒ぎを起こし、警察にたな

った。警察署で長男は「お母さん、変な薬使ってない？」と警察官に尋ねられたが、長男は「見たことない」と答えていた。帰宅後、長男は「ママ、元気がないね」としか言わなかったが、この時ミキの薬物乱用に気付いたようだった。その後、思春期を迎える、長男は「お前がヤクチュウだったからだ。おれだって好きにさせて」と暴れた。学校を抜け出



触れ合うことで安心する。子どもがいる薬物依存症の女性は、母親としての自己肯定感も低いという(ダルク女性ハウスで)＝三輪洋子撮影

## 親以外の大人が支援

したり授業を妨害したりした。警察署で長男は「お母さん、変な薬使ってない？」と警察官に尋ねられたが、長男は「見たことない」と答えていた。帰宅後、長男は「ママ、元気がないね」としか言わなかったが、この時ミキの薬物乱用に気付いたようだった。その後、思春期を迎える、長男は「お前がヤクチュウだったからだ。おれだって好きにさせて」と暴れた。学校を抜け出

着きを取り戻した。「親子だけの関係よりも、風通しがよくなった」とミキは思っている。

子を持つ薬物依存症の女性は、精神的・肉体的に、また経済的にも子育てに困難を抱えていることが多い。そして子どもは依存症の母親と一心同体のような関係になり、社会に助けを求めようとしないう傾向があるという。

ダルク女性ハウスの顧問医で心療内科医の須賀一郎さんは「薬物依存の親を持つ子どもは、思春期に不登校や非行など問題行動を起こすことが多いが、そんな時に支えてくれる親以外の大人が必要だ。海外では、薬物依存者だけでなく、家族のサポートも行われている」と話し、薬物依存症女性の子どもへのケアの必要性を訴えている。

(月野美帆子  
おわり)

ミキ自身、小学生で両親が離婚し、相次ぐ転校といじめに遭うという不遇な子ども時代を過ごした。自分の子育てもうまくいかない悔しさを、ダルク女性ハウスのミーティングで話した。

代表の上岡陽江さんは「母親がダルクに通って少し落ち着いたから、長男は反抗したり甘えたりして、子どもとして振る舞えるようになった」と話した。これまで長男が妹の面倒を見るなど親の役割を果たしてきたことに、ミキは気付いた。

長男をダルク女性ハウスに連れて行くと、親以外の大人と付き合う中で、次第に落ち

50歳代男性。小さな会社で営業の仕事をしていまして。年相応の収入があり、妻も働いているので、生活には困窮していません。ところが、妻が異常なお金執着に陥ります。出費を極端に嫌い、度を越した節約

しても安心につながるから検査を受ける価値はあると考えます。しかし妻は病気でなければ検査代が損だと思っております。

検査の結果、十二指腸潰瘍とわかり入院。その際も私の体より治療費の心配をしている

妻にする